



主從心得草三編

下

□ 9
3457
6



3457
6

藏書

主従心得草三編下目錄

山本勘助松田七郎左衛門と軍法論談の事	二丁
兵法の書始めて我朝へ渡る来由の事	五丁
大公望孔明の始めより軍師とある事	九丁
山本勘助於田と劔術試合の事	十四丁
山本勘助比條氏康江御目見の事	十七丁
山本勘助義元江御目見の事	廿一丁
列禦寇國君よりたまふる米穀をわへる事	廿四丁
平原君趙勝天下の賢士を集むる事	廿七丁
平原君愛妾を切て天下の賢士用ゆる事	卅八丁

主従心得三編下

おつら

おつら

一 今川義元候木下を用ひざるの事

三十四丁

一 今川義元候討死の事

三十六丁

一 山本勘助の事

三十七丁

一 山本勘助の事

三十八丁

一 山本勘助の事

三十九丁

一 山本勘助の事

四十丁

一 山本勘助の事

四十一丁

一 山本勘助の事

四十二丁

一 山本勘助の事

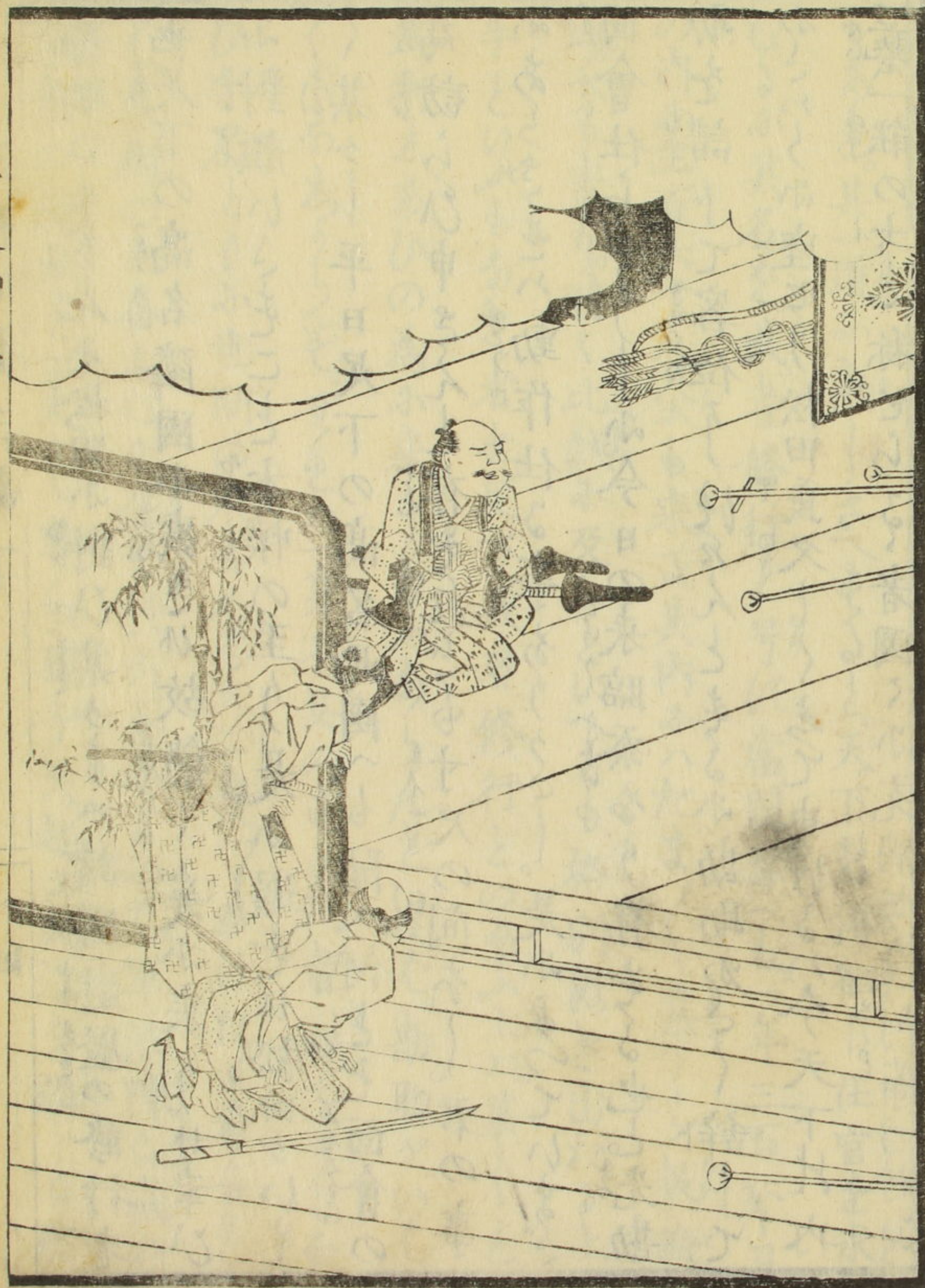
四十三丁

主従心得草三編下

○天下を治め家をおこもの一大事なり。よき臣下を用ゆるふあり。治世さへよき臣下があつては治まりあつ。い
 らんや乱世ふら猶更大人用とあるべし。是れよりしてよ
 き臣下を急度求めよ。今川義元候の家来庵原
 安房守が山本勘助の才智武術共み万人の勝をたす者
 あり。御用ひあつて然るべし。強てまめけきとも。山
 本が見よくきを以て。用ひぬるべし。兎角義元の賢不賢を
 見ることあり。又賢人の國の實といふ事も篤とあり
 ぬるをぬと見へたり。其次弟を少く下りあるを。甲

越軍記初編七ふいそく本朝大永天文の間。劍戟鞘を出
 るの時。俠勇の士。劍を佩鍵を荷ひ諸國を往来し。用ひ
 らもん事を専らとに。爰小山本勘助も三州牛窪の産
 みて武田晴信公いまだ勝千代といひ一時。世をうぶ主従の
 内約をあらめ。天文三年の春より心小深く思慮あり。あ
 兵法修行し事おせ。關八州を徘徊し。東ハ奥州の果ま
 でも隈あくあるき。或ハ半年又と三ヶ月所より逗留
 し。兵術を試し軍法を討論し其國々の弓矢の法諸士
 の剛柔を見廻りける。その比英雄の大名天下ハ満武藝
 者と呼ぶ者家々小備とをこり。中おも相州小田原北條

相摸守平の氏康ハ伊豆相摸を取勢ひ近國よりとるきけ
 をむかの家の弓箭の法を試むべしと。小田原の城下よ
 至りぬ。其頃北條家。武術の師小松田七郎左衛門とり小
 者あり渠ハ十文字の鎗を鍛鍊し隣國ハあらふ者
 ありと聞えし小より。の色ガ方小ありむき。其人物を
 見て。此家小逗留せんと松田ガ家小案内しむ。折
 節松田ハ誓古所より出門弟共小鎗術の教授をして
 居たりしガ。勘助来ると聞て。人を出し請し入其容小
 を見る小至りて小男ありて其上小片目趁也。座中小
 あり合若者とも。是を見て目と目と見合せ笑ひける。



三
初
心
行
三
卷

勘助いんぎん小松田小對ひ。某がーの諸國遊歴の修行者也。足下の高名隣國小裏きい故態々爰小来りい幸ひ小對顔いこと本懐の至り是小過むい松田がいとく某がー平日足下の高名此國へも聞へ何とぞ面會の為訪らひ申さんと存むれども寸尺の間あし。君の事小あつていふ動作仕る事ありがこし。是小あつていふ面會仕らざりい。今日の來臨忝あり存むる也。先勘助を請トて客位りはなんとまゐる小。勘助かこく辭トてかこらう小座せり。松田良久くして申けるい。今天下は内一藝一能の士と称せらるる者國々小充滿せり。何等の術も

もあま。其一道小熟しとまゐると。天下を徘徊し。仕官を求めむ小其名を。武者修行と号し當國杯へも。一年三百六十日の内小三百六十人余も來る。其内小はたま〜某が教諭場へも來り。時々比試小及ぶといへども格別ぬき出たる上手とり小もあき者也。足下武者修行とのあふ上ハ。某と武者あひの為小來り申あらんといへむ。勘助がいとく。いおあつていふ。一身不具のまゝこれ者。一眼をうしおひ手足とり小世間の人とあつて。一隻づあけたる者あまむ。武術の立合も心小任せぬあまふのて。軍法陣立或ハ城郭の繩張を工夫し。専ら孫子吳起が兵法を講ト自然

軍法も長ドたる人あつた。其人と討論一身の及はざる
 所を修行仕らん為あり。夫故も國々も於て高名の人さへ
 あまべいんぎんも訪ひ高論をもちけむる者也。此國
 も於ては足下の高名隣國も流布せり是も亦例て一番も貴
 兄の元も参りたりと。あへて武術もとりあそむるも松田が
 いそぐ然らば軍法あそ張の事を宗として修行一給
 ふあらば更も某が預る所もあらむ。そのくも一き事ハ存
 せぬといへども。凡そ軍法の起り人王九代開化天皇も
 御宇漢土より履陶とり人初めて太公望が六韜孫子が
 十三篇を渡せり。其時ハ前漢の景帝の代もあつたりと

り。あつるも本朝文字の学いまも行ありきむ。うの兵書
 ありといへども。こゝを讀事あつた。其も朝庭も傳を
 り一所。人皇十六代應神天皇十六年も百濟國より王仁
 とりも者来り漢土の學始めて我邦も行り。天子もこゝ
 を學をせむひ文字の意味是あり 解得して其後かの
 履陶が奉り一所の兵書もよむべきやうもあり應神天
 皇えいらんまゝして熟く思召けるハ此書ハ兵者をも
 ちゆるの法也。一是を世上も押ひあむる時ハ諸人兵者
 を用ゆるの法をあらむ 叛逆を起す者多かるべしと思
 召て。忽ちやき失ひぬひける。其後人皇六十代醍醐天

皇の御宇ふあり兵書ハ國家を治むるの道ありしを
 りの事を聞し召を延長元年五月大江の維時とりし人
 を入唐せしめ兵書を求めてわしめし是より兵
 書まこと朝廷ふ傳たりしうども用ゆる人あり合戦乃
 道ハ漢土の兵法をうらむして我國ハ唯自然と戦ふあり
 て兵を用ひしり。まをふありとき神功后宮三韓を
 征伐しむし時。いまぞ漢土の兵法をあらしめしをむといひ
 も。三韓を切しめ歸朝ありたり。是自業自得の兵法
 ふして學びし道ふあらむ。叔その後天慶の頃將門純
 友をせめらしむし時。むしむの兵法ふありといふことを聞し

む。皆敵をやかり乱をまづめしり。うの維時卿漢土より法
 たへ歸りし兵法。初めて武家ふ用ゆるやうふありし人皇
 七十二代白川院の御宇。八幡太郎義家公朝廷へ奏聞を遂
 むしりの兵法の書。朝廷ふ秘しおきむしりも。何の益り候
 らん。天下を治め主上を太平の御代ふ置奉る事ハ武家ふ
 あり。願わくし左大弁大江維時傳來の兵書を武家へつ
 たへら下さるべありがごとく奉存と願ひ申さしけし
 を。早速 勅許ましりてかの維時卿より六代目。大江
 の匡房卿ふ 勅して太公望孫子呉子等の兵書の大事を
 石清水八幡宮の御宝前ふおいて。悉く傳授せしむ。是ふ

且八幡太郎の宝物とあまり。義家公思慮一むふ異國
 と我朝とい土地人氣ひと一あらむ。人氣小應せざるこ
 とハ。兵書といへども用ひざる所あり。異國の道を以て我
 國の人氣小叶ふやうふまべ一と兵法の書を取捨一めき
 直して訓閱集とり小兵書三卷を作り。虎の巻と名付子孫
 小傳へりきたり。其後源義經虎の巻を熟学して兵法の
 大事を極め。平家を一の谷又ハ八島小やぶりあふ是皆虎
 の巻の徳小よまりとらけむる。其後楠正成新田義貞
 の如き豪傑あらび起るといへども。唯何の兵法いづも忠
 流義を以て敵をや敵り一と小ことを聞む。唯戰場乃

敵をふんで。虚く実々の妙義を知りむへり。然らざるを
 実の兵法といひひごとし。足下ハ三州牛窪小生を人數五十
 人とも持む小人とも兼らば。破るる城一も持むひた
 る事あり。一邑一村の主めあらば。いづる小壘のりへ小
 人形をあらへ。土をつう採て。城郭の形ちを作り。かくのご
 とくせむ。敵をやぶる小便りあり。かくの如くせむ城の
 かまへ堅固ありと二十分一の小形をつくり。胸筭用をやる
 るハ倍小り小畑の水練と申す者小て。役小立ぬ事也。太平
 の時た。この上あて高論をり小時ハ。何事を申まともよのけ
 是れも。まことの戦場にのむ。かひたいことをあらへ。矢炮

を飛を時ふいたりてん。心膽取みだも。号令行ありまじ。
 采配も行届らば。内小在て利害を存ある。と甚と相違
 する者也。論のこ高くして業小わすていさつたり。埒明
 ぬ。日頃の論ハ虚論小して。何の益なき事也。然らば軍法の
 法則ありて法則あり。弁論ハ只舌の先の強者ガひひ勝と也。こ
 傍若無人小罵あり。凡そ一藝小秀たる者ハ万端小わし。あき
 名の師範あり。凡そ一藝小秀たる者ハ万端小わし。あき
 者也。是小よつて高論もあらん。とわりの所小。案の外小
 る論判。世上無智の倍人小おち。未と古里小をのぐま
 ざる。浅ましき論あり。我どりあまざる小あう。トといへ

ども。少しをうり口をひらくべし。夫智小ハ上中下の三ツあ
 り。上智とゆふハ天性の聖人のごとき者是あり。中智と
 ゆふハ學んで自然小妙小いたる。下智とゆふハ區々たる世
 の流俗小して。足下のごとき人是あり。下智小して上智
 の人の心をある事あり。上智ハ学をばして自然の妙處小
 いなり。工夫をうらむとして其よろしき小當る。上古の太公望
 の類是あり。紂の乱をさけて。東海の濱小居り。其後涓
 水小釣をたも。八十歳小あまると。逆身小従小物として。一
 本の釣竿のこ。奴僕の一人もつら小事をき水辺の釣翁小
 り。然るる。文王の夢小あり。忽ち軍師小拜せし。石窟

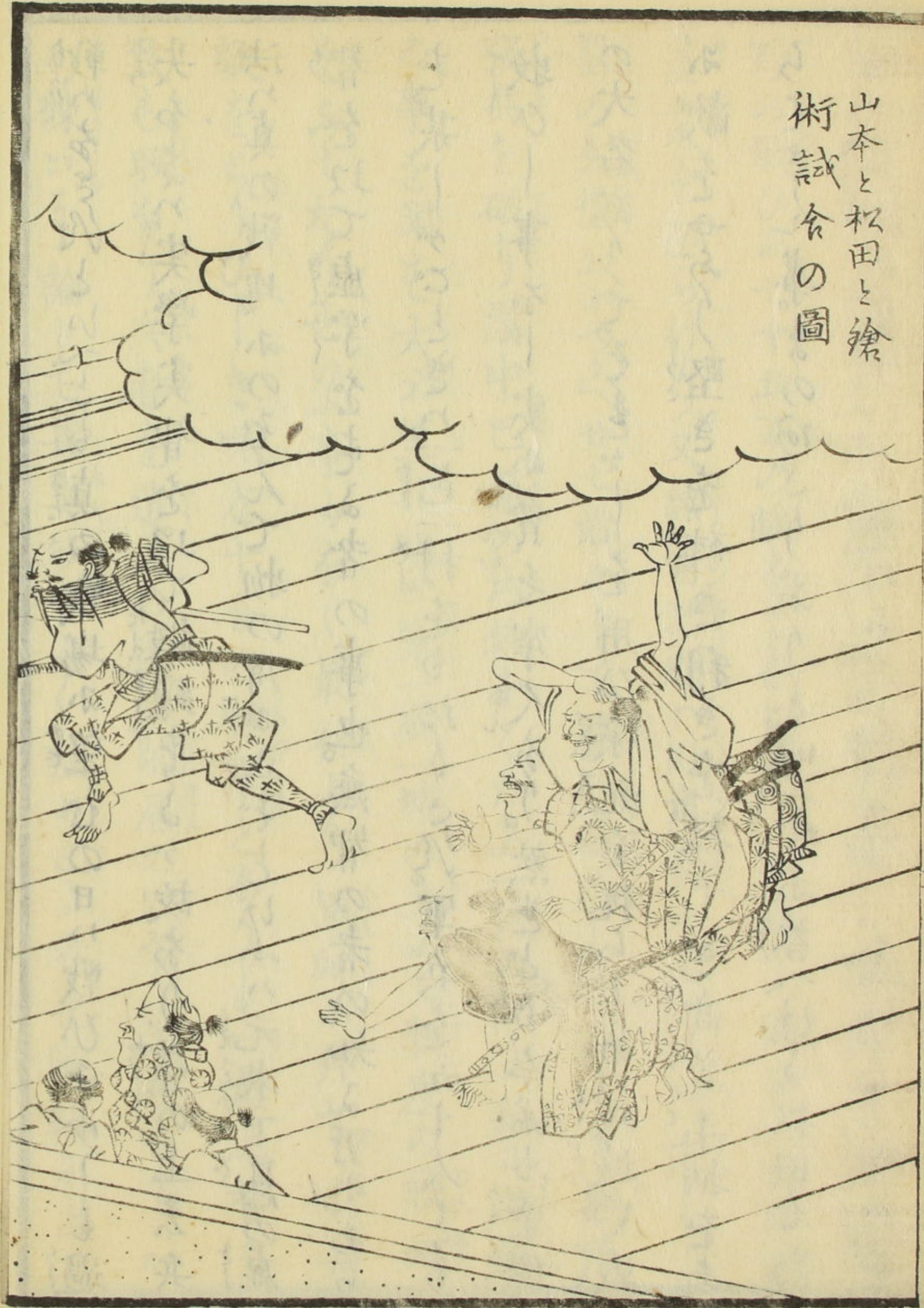
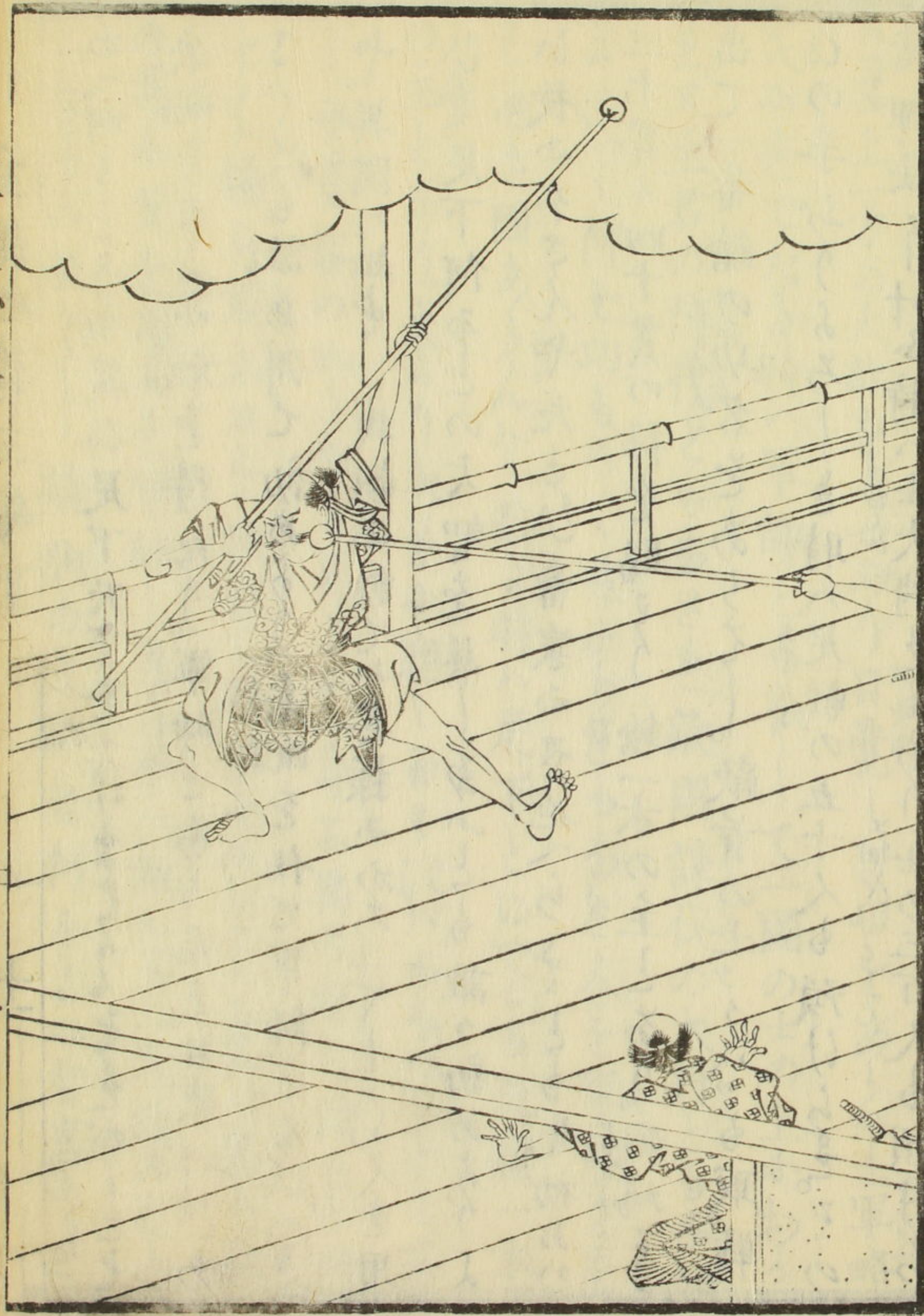
主従心得三編下

七

を出て殷の紂王をやる時ハ車ハ座一團扇をふり。牧野の戦ひぬ。七十五万の敵をこふごら一ハ致一。周家八百年の基業をひらけり。又諸葛孔明ハ卧竜崗ふもめる隠者あり。蜀の玄德公ふつと廿七歳ハ一柴の扉をお一ひらき。魏乃強兵を破り漢中巴蜀の大敵をくだき。一代の間と終ハ敗軍の事を聞む。大公望孔明ハ葦一國一城の主ハて数度の戦場をふとたりとりふ事もなく。最初あり軍師ハ拜せり也。大敵をらりひ一ぎ。味方十分の勝軍とあり一ハ。是上智を致も取あり。兵者を遣ふの道ハ閑居のいなりハ在あご心ハ練口一論トて其真妙をよく極めざる者也。戦場ハ出て

戦ハあそびといへども。真の戦場ハ望むの日の戦ひハ少一も過失ハあまハ。実學実智を以て鍛錬するハ故あり。畳の上ハ兵法ハ真の戦場ハのぞんで物の用ハ立むとりハ。元来下愚の虚智を以て。虚学をよむる者の事也。無智の者の知る所ハあらむ。某一ハかごときハ。一邑一村をもちたり。軍兵を五十人とも牧一ハ事ハ一実ハ貧乏窄人あり。然もども今ハも豪傑の大名ありて。そま一ハを用ハ采配を執ら一ハ攻城野戦ハ敵をやどり堅きを砕き利きを挫一ハ。高名手柄をあらをさる事。もの所一ハありと。唯一言ハ答へけり。松田を勤助ハ答話ハ足下ハ下愚の小人といひ一ハをいくり。顔色を

主従心得三編下



かく呵くとうち笑ひ。足下天下をうけまをり。そまがこと
 采配をとりふ妙を得たり。軍師とあらんと。日夜叫びあ
 るくとも。誰あつて初めあり。采配を任せ軍師とあはべき
 や。異國の知む。我朝ふ於ては其様ふあらぐ。く人を
 ひむ。足下何れどの大智を具しあふとも。誰う初めよりよ
 い役ふあさんや。たとひ當家ふ召抱へらるるとも先初めは
 三十貫う四十貫の禄を賜り。鎗一本の主とあり。戦場り
 出て一番鎗の功名をあらし。敵首の七ツハッも取。戦
 ひの手ぶりよろしき時。足輕の五十人も預けらる。その
 指揮法り叶ふ時。士大将ともあり。士の三百人も預けら

る。其上一方の大敵をもやぶり目覺しき功をあらし。軍略
 実ふ秀でたる時。軍師ともあり。一國の士の上にあら
 る。又主君の陣代ともあさる。敵國誅伐の大將ともあ
 らる。何を功もあくをらる。きもあき人を軍師とも
 さる。き國あらんや。然る時。足下といへども先鎗一本
 の主とあり。夫より次第ふ進む。むははあひが。某
 一今貴客のわさちを見る。ふ一身不具の廢人。諸士と同
 しく鎗を取。太刀を提げて戦ひふ。のをとむ。忽ち敵
 の為ふ首を取らる。軍師とある事。は扱あき一人前のも
 らきも出来が。穉脚の支離者何れどの智恵あるこ

も。齒はみあへるふたつと居丈高おしほみあひて罵ののしりけむ。
 勘助かんすけとゆふ答へらる。尤なほと采配さいはいを握にぎり軍師職ぐんしやくとある者ものは。先下まきさみあひて兵糧へいりやうを炊くく人歩あひぶの業わざあり上あみいさ
 てハ大将たいしやうの行ゆきみいたる。追お悉しつくあつむといふ事あり。いそ
 んや武士一人前ぶしひとりまへの業わざをおとほして。口くちをひらうは是こゝ狂人まどうじん乃
 所為ところゝと申まをを者ものあり。何なにをおおへあつて。口くちをむらうんや
 といふ。松田まつだかいそく。今の世いまのよも武士一人前ぶしひとりまへの業わざといふハ鎗術きやうじゆつ
 あり。其故そのゆゑハ戦場せんじやうの勝かち口くちハ一番鎗いちばんきやう二番鎗にばんきやうとりし事あり。も
 しろりの試合あひあひもせよ。のちハ所ところ虚言きよごんあつて某たれ一ひとが鎗きやう
 先まき立たて比あひ技ぎを好このむ。勘かん助すけかいそく。とをあへて比あひ技ぎを好このむ

もむ。尤なほと人の情なさけこして。勝時かちときハあつて負まける時ときハいきどぬ
 る事こと古今ここんも通例つうれい也。某たれ一ひと壯年さうねんの時とき。眼流がんりゆうとりしけんを
 つを好このむ。又また鎗術きやうじゆつを鍛錬たんれん一ひと諸國しよこくを徘徊たふろひして修行しゆぎやうする
 内うち。比あひ技ぎも打負うちまひする日ひハ。別条べつじやうあり。安穩あんゑんあり。又また勝かちを得える
 時ときハ。いきどわりをふくまむ。深更ふかみも及および。待伏まちぶせもあひ
 殺ころすこととせむることたびく也。又またハ大勢たいせい黨とうを結むすび理り
 不尽ふじんも打果うちたさんともむ。危難きなんも合あふ事こと數かずをあらむ。其
 たび毎まも。きびを蒙かぶり手足てあしを折おし。眼目がんめくを失うはひ。あつ
 のどくある支離しりとある。且またハ生なまき付づのかつとみあはら
 む。志こゝろあひをまむ。度たぎ毎まも。意恨いこんをふくまむ。きびをつけ

主従心得三編下

十一

らえて今の奇特のよい人とあり。勝負事比技事しあひの出来
かごし其勝を得えころはとせがーが人ををまうりて勝た
るあらば皆めまが手練しゅれんの未熟みじくよりおこまり。唯今とて
も同一事也。そまがー今日足下と比技をまることも
需もとめて仕る事もあらしも。且下勘助がりふ所。口くちと行おこひせ。
ひとしきやいあやを試いさんとの事ありといへども自
然某し一い僥倖いんせいふして勝を得たる時ハ。足下の修行未熟
かして其科某しが預る所もあらし。後日ごにちふ怨うらをふくむ
まどき公平こうへいの心あらし。勝負しやうぶふ付てたがひも恨うらをふく
むまどきといふ。誓約せいやくをく免めん木刀ぎとうを以てころ見るを

。若いきどなりをふくむ心あらし。某しが只今の過言
をあるして歸かへしむ。藝術ぎゆつをうり物とし。禄ろくを求めん
が為ため小徘徊せうわいするもりのふあらし。むとまら。立起たてたる君子くんしふ
逢あて自己じこの修行しゆぎやうをあるさんも為あり。此道理しだうりをよく察さつし玉
へと申ける。一座いざの内うちも其高論かうろんあるを感かんし。比技しあひを止とむ
るもあり。又ハ勘助かんすけが今いまの一言いっごん穩當えんたうふして。比技しあひを辞しし。此
場ばを遁のきんと座ざを心得こころえたる者ものハ。ひらふ一試合いっしあひしむへと
まむむる者ものも多おほうりける。元来もとより松田まつだハ自己じこの藝術ぎゆつふたうぶ
り人を人ともせざりしうべ止とまるも氣色きしきもあらし。勘助かんすけふ
向むかひ申まをしけるハ。某し一い決けつして後怨ごうらんをいいごごまど。又またあ

三徳心待三編下

二

三

あがちのきどわりを以て試合をまゐるめあらば。貴客の武
 術勝をたぐふ於てい。主君相摸守へ吹擧致し君の為不足
 下をそむむ心術也と強て止ざるふより勘助も然らむ
 とりよて身をととのへ比校の用意ををしふける。此時松
 田が門弟子も引方とりふ。諺ふひとしく。むとまらう松田
 小勝をとらせんと。神水をのんで視ひ居る。門人鎗を取
 て双方ふあさへけむ。勘助其鎗を見るふ柄の長さ二間を
 くり。先ふ藤の皮の牡丹を付たり。勘助の左の手指二本の
 こ。されども母指のあひたふ中りの柄をもちこ。けいこ野の
 中央より進て出元来小兵の上。一身不具の人物。勝べきやうなり

を見へざりける。松田の身の長六尺をあり年齢四十あり
 あして。勘助とくうぶむ。後いあらば。さるうふむ。さるう
 く見えふける。互ひみ辞義を致し。まてふやり頭を進め進
 付とひとしく。雷光いあづまのごとく。早業を交へ突むた
 び。何をも屈伸自在の妙手。些しも透間あらばこそ。互角
 のあるまひ負むおとらば。戦ひける。此時志あひをま
 める。門人の手ふ汗をぬぎり。止たる。門人らの勘助が
 鎗術凡夫のまごふあらうざるを見てより。あき比校をり
 める。りのめかと片濤をのんであがめ居る。勘助が鎗術
 たるめふこへ身をひるがへし。突入と見えたる時。松田の面て

三編下

をつらきて。尻居しりおみどりと倒たふせたり。一座の門人此有様おか
とろき声をのんで一言ひとことも出いで者ものなく。しづも顔を見
合せて居ゐり。其後三度追試合を致いたせしが。手て段だん少すくく
もみちるべ。鎗法やぶ拔は群ぐんみ勝かちをうり。松田ハ勘助かんすけが不具ふぐり
して練磨れんまの功こう準じゆん絶たつあるをうんと。大いみぎを致いたす。諸
門人と共とも勘助を上座じやうざめして。誠まことみ唯今の御手ごて練れん某たが
輩はの及ぶべきみあらむ。この年頃鎗術者やぶ云い者ものみ出合であ救きう
度と其藝を心見るといへ共。今日の如く目をふらうりた
る事ことあり。此一術を以て余の妙技めうぎを推察すいさつ仕つかること堪たと
り。我家わがやみ救日逗留きうじつとらうりし。主君しゆきんみ吹舉ふいき致いたす。當家たうやへ取

持仕もちつからんと申しけを。勘助ハ松田まつだが疑念ぎねんをもちひ。腹中はらちゆう
み物ものあきをうらむ。あきて十日じふにちむらりも渠これが家やみ止とま
りける
人を殺ころしたうり其恨いで殺ころさる。此方こゝみあごを
たわら。憎にくむといふハ尤なあま共とも。已なまが無器むき用よう未熟みじくみ人
み負まけあがら勝かちたる人を恨にくむ憎にくむ是ハ大おほひある無理
あま共とも。あまある事也ことなり。已なまが未熟みじくでもけたら勝かちる
人を師匠ししやうといひて習なへをふいぬ。そふいせびして。恨にくむ憎にくむ
て間打まうちみせんとまゐる。から誠まことみ油断あぶらだんありがごとく。人を
人みひいむると存ぞんとらうり人み憎にくまるとあり。

高木ハ風ハ吹折ラセ。出た。抗ハ頭ラをう。この道理
 あり。用心まべ。是ハ兵法劔術勝負事。わうり。あ。あ。あ。
 存トの外出世を致。身上をよ。すると。是を憎。そ
 縁む人あり。狂哥。○中のよい隣り。も今ハ。そ。り。け
 る此項藏を立て。り。後。の貧。の。せ。思。ある人。を。を
 是。不沙汰。の。や。あ。げ。を。い。み。誹。り。を。受。恨。を
 受。る。苦。ハ。あ。け。色。共。受。る。事。あり。況。や。勝。負。変。色。欲。の
 恨。と。採。ハ。又。一。際。深。く。一。て。思。ひ。あ。ら。ぬ。災。難。あ。あ。あ
 事。あり。急。度。用。心。ま。べ。

松田七郎左衛門ハあきり。大守氏康ハ吹拳。あ。け。を。バ。然

ら。勘助。ハ。對。面。せ。ん。と。城。中。へ。召。ま。け。る。山。本。勘。助。ハ。松。田。ハ
 隨。ハ。ひ。登。城。り。一。座。の。為。体。を。見。る。り。先。上。段。り。を
 相。摸。守。氏。康。の。座。を。ま。り。け。い。ま。ど。出。座。一。お。り。左。右。ハ
 ハ。松。田。尾。張。守。大。道。寺。玄。蕃。其。外。の。諸。士。ぎ。ぜん。と。一。著
 坐。一。其。体。甚。ど。嚴。重。也。諸。士。勘。助。ハ。一。眼。ち。ん。を。あ。る。を
 見。て。互。ハ。目。と。目。を。見。合。せ。笑。ひ。居。る。あ。ら。う。く。有。て。氏
 康。上。段。ハ。立。出。お。ひ。勘。助。ハ。對。面。あ。る。其。体。尤。あ。ら。う。り
 勘。助。平。伏。一。拜。一。仰。り。で。側。を。見。る。ハ。翠。簾。を。あ。け。た
 一。間。あり。其。内。より。異。香。あ。ん。り。く。と。一。鼻。を。う。ら。う。り
 ち。り。也。此。所。ハ。教。百。の。女。今。日。勘。助。ハ。氏。康。を。拜。ま。る。を

今川義元の城門の圖



山本勘助



庵原安房守

見んと。みまのひまきよ几帳きやうのうげあり。のぞき何となくひ
 そめきまや叫まやく体。おまむもき事ことりぎりあり。勘助拜顔かんとくばいがん
 終りて座を立んとまゐる。一身不具いしんぶぐある上。ちんむあまは
 立居飛たていひがごとく。氏康志のびがごとくやありけん。嘔くくと笑
 ひおへを。最前さいぜんより声こゑをのんでらうへたる。近習きんじゆ六七人笑
 ひ袋かぶろの緒ををきらう。声を出して笑ふ。最重さいぢゆうお座一
 たる諸士同音しよしどうおんお笑へ。一間いっけんの内うちおあみ居いる。女房共にようどもさ
 ねきごお笑ふ。女にようの常じょうあまを。まをを忘わすれて笑ふ声。
 雷らいづちのあゝふとあゝむ。流石りやくし容形ようけいの。あゝくきをををづ
 る事ことあき勘助かんとくも。赤面せきめんしてぞ退まひきれる。氏康しやう左右さうを見

あへりて。扱あて見みにくき者ものもあまを何なにる者ものあり。七郎左
 衛門志しきりお推攀おしきりせ。おありて。對面たいめんはい。たれど
 も。是こゝはどの不男ふおんとん思おもはざりき。彼かれたとへ何なにぞ多能たのう
 ありといへども。あまをいの人物にんぶつ何なにぞの事ことうあらん。當家人たうかじん
 小事せうじをうきたること。四体たい具足ぐそくせざるののを抱かかへて。何
 の益えきう何なにらんとのおふ。松田大道寺まつだみちだうじも勘助かんとくが不具ぶぐある
 を見て。敢あてよろこを。七郎左衛門しちらうざゑもんハ松田尾張守まつだおしやうしゆ大道寺みちだうじ
 玄蕃げんぱんおついて。さあぐみさとをといへども。あつて執持しやくぢ
 人ひとあうり。おあり。是非ぜいひあく城中じやうちゆうを下くだり。勘助かんとくお向むかひ
 此こゝよりをあゝりけむ。勘助かんとく莞尔くわんにとして申まをしけるハ。

諸州を徑歴して國々の諸侯もまゝとて一うども。いまも今日
 のどくあるを見む。号令嚴重あらざる時ハ其國極老て
 危き事あり。當家の如きは東國一二の大家也諸士の多き
 正星のごとし。威令を以て諸士を治めまらばを。大國をた
 めちがごとし。今日の為体くたとへ勘助があるまひ見ぐる
 一々て。笑ふ小忍びごとくとも。大将の座前恐きあり
 と思は。何条笑ふことのあるべきや。ひつきやう大将を
 大将とせざるふよりて。おのづから笑ひも出るものあり。又
 かさねらうの一間見るふ。多くの侍女ともの内ふあつて。色
 を見物せり。是又女色を重んぶあがいと所あり。色

をこのと威權をみぐるハ亡國の端あり。足下何やど勧め
 らふとも御用ひあり。それも又爰ふとまある心やと
 りふ。叔勘助ハ其翌日旅行の用意をあり。小田原を打
 立んとまあるふ。松田ハ此やどより勘助が実智實学ある
 ふ伏し。意々として別るふ忍びむ。止むるといふとも。何
 へて止まる氣しきあり。勘助ハ此はどより松田がぬんぎ
 んあるを謝し小田原をいぞ。夫より鎌倉ふあのみき扇が
 谷の上杉修理大夫憲政の方ふいり。爰ふ止まること數
 月。そまより又上州ふ趣き。倉ヶ野越中守が家中ふ止まる事
 三月わたり。爰ふ二月わるとふ半年と。諸州をめぐる。天文

十二年の冬十二月駿河の國に越今川義元の城下におもむ
きける。爰に今川の長臣に庵原安房守といふ者あり。智
勇武略人ふと。又人を見る事ハ。漢の蕭何が明ありて。あま
孫く名士を吹攀まると聞えしを。うきか人物其大機
を心見んと。頓て庵原が家にお至り。名札を出して。對面せ
ん事を願へむ。安房守も勘助が高名を軍事又一。早速
出迎ひて對面し。其人物を見るに醜き事あざりあく。又
小男あり安房守曾て人物のよめくきを嫌はれ。ある不
具ある身として。其名諸方にお聞ゆるものハ尋常の人におあ
らばと推察致し。數日我家におよめあき。兵法の道を論

むる。中々安房守が及ぶ所あらず。扱は此人の高名を天
下の香をききもことありあるう。わいりあもして此人を
義元公にお吹攀せんと思ひける。庵原の勘助を久しく
留め置て胸中の大智を深くうかふ。孫兵が兵道の
玄機を以て。己をかりのとなし。當時諸家の軍法をい
ふ者と。目を同ぢうして語るべからば。安房守深く感伏
し。天晴かゝる豪傑の訪ひ来る事。當家の幸ひあらまじ
んふまゝめて高禄をあへ。當家にお止めんりのをと。頓て義
元におまゝめていむ。山本勘助といふ者其産ハ三ツノ人。諸
國武者修行をして。普く東西を巡り。適く爰にお来り。

某が家が家あり。徐く愚意を以てうれが胸中此文機
 をさぐり伺ふ軍法武藝ニツちがら技群の者あり。あ
 當世軍術を以て世上の鳴者の能及ぶ所ありむ。い
 てもあげ用ひあべ。當家を富を謀計ふひいと申上
 り。義元悦喜斜ありむ。昔勘助が名をきくこと尤
 も久し。速く伴ひ来るとありむ。天文十三年正月勘
 助を誘引して立出る。義元の左右あり。朝比奈右兵衛
 三浦の如き。一班老臣其外謀士諷者巍として列座甚
 嚴重あり。群衆の諸士ひとく。眼をあけて勘助が出
 るをうらみふ。小漢子にして相貌よく。左の足遠か

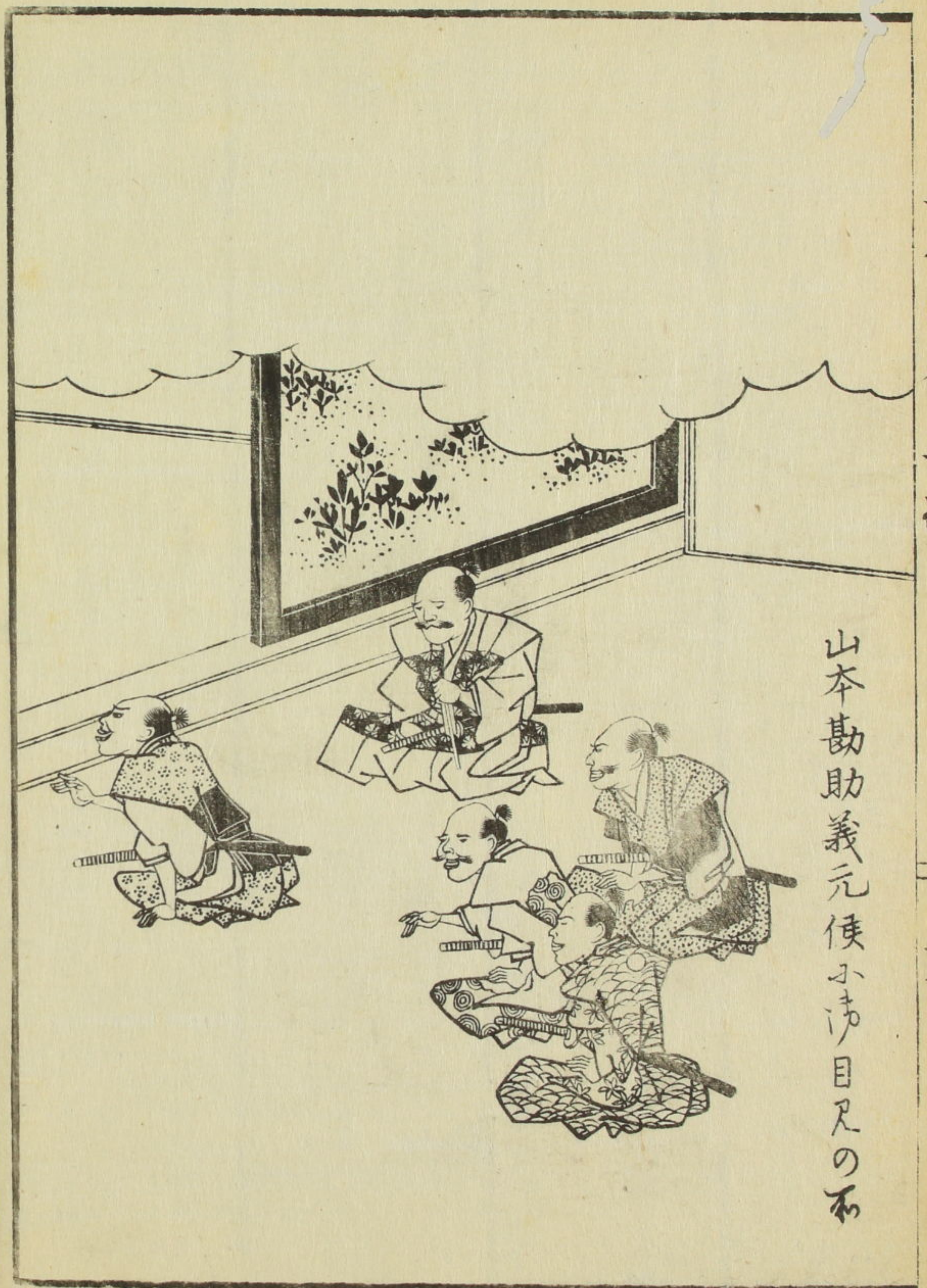
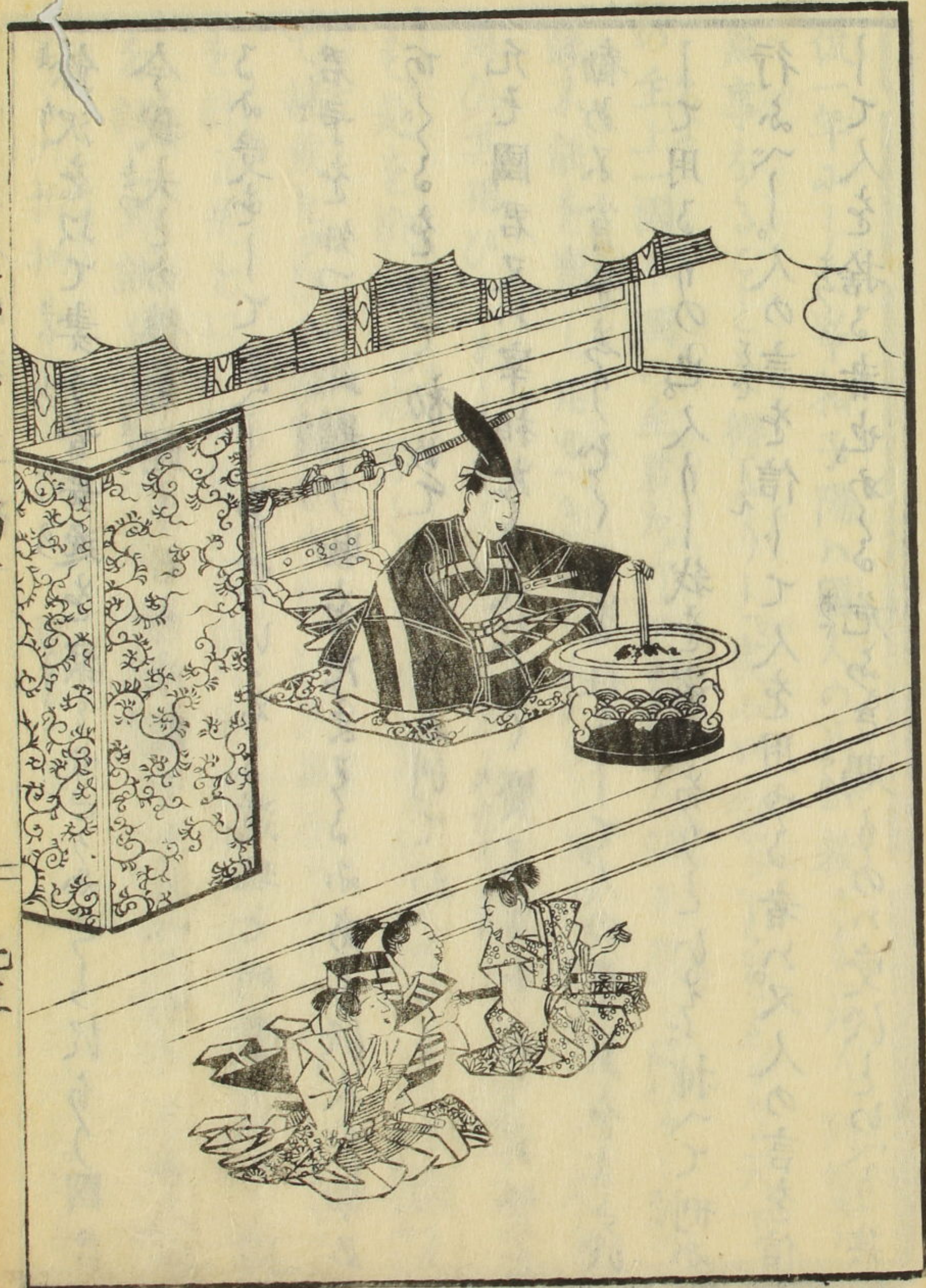
座前歩こ来る。模様行歩飛ぶかごとく。又的確
 をふむかど。一座の若侍ひこの有状を見て笑ひを忍び
 とまらふ。堪が。末座ありたる少年五六人。忽ち笑ひ
 出まふ。其あともう並居る者も堪う糸て笑ひ出せば異
 口同音。小咄とさげびりむ。義元も近臣の忍びうむる色
 の可笑さ思ふ。笑ひ催さる。安房守群臣のつりまざ
 るを以て心小悦びむ。苦くき顔色。御前小向ひ諸こ
 く修行の名士。山本勘助御目見へ仕ると申まふ。義元
 者道もあく。勘助を近く召せ。高名の壯士。去年以来安房
 守の家小客居せりと。武術といひ軍略といひ等倫の

たぐひありざるありを聞傳へたり。願くは即今座前まへり
 於て。武術の玄妙かんめうをあらわすもべし。當國の士不器用ふきりゆうは
 て。武術ぶじゆつの突出ぬきんでたる人希まれあり。尔しもども一兩輩ふたつう普通のも
 のあり。先まづ劍鎗けんそうの二枝ふたえだを試こさんと有ありませむ。勘助くわんすけ率然そつぜん中
 して答へらるる。僕わがも不具ふぐの廢人まいじん千ちの一いつも取所とあり。試合しあひの
 義ぎの御免ごめん下さるべしとりの。是こゝの一座いざの人々ひとらを始め義元ぎげんの
 高たか声こゑの笑わらひあかどりむづろしめゆふを以て。上かみの嚴重げんじゆう此
 威いあかく下しもの重禮ぢゆうらいの法はふあり。國家こくがの久ひさしからむして亡なぶべ
 きと悟さとりし故ゆゑ。少すくしも謙讓けんじやうの禮らいをあらはせ。某たれも平生へいせい字
 ぶ所しよの。乱らんをまづめ國を安んむる所しよの軍法ぐんぽう軍略ぐんりやくあり。若采わくさい

配はいをあらめて智策ちさくをめぐらむ時ときの戦いくさのどして敵てきを伏かし。戦
 ふとどども寡くわを以て。衆しゆうを敗まり。野戦やせん攻城こうじやうは是こゝ元帥げんすいの任めん
 たるつとめを専せんらとし。あへて匹夫ひつぷの術じゆつを好このむ。たとへ劍けんを
 とらさへ。鎗そうをとり。千軍万馬せんぐんばんばの中なかの縦横じゆうげうして終日しゆうじつ手てをくた
 きて戦いくさふとも。且また外ほかの三級さんきゆう五級ごきゆうの首くびを取とり。夫つまを高名たかと
 するハ平士へいしの所業しよごうあり。此故こゝ少子せうし劍術けんじゆつ鎗術そうじゆつあどの小枝せうしハ
 不調練ふてうれんふいとそめる所しよあり申ましけむ。義元ぎげん候ごうハ山本やまもとの
 男おとこつぎとめくき上かみ不敬ふけいの答話こたへふりきどりやをふく。故
 たびとらゆのこころもあ。座ざを立て入いりて。勘助くわんすけ安房あふ
 守まもり共ともありむきぬ。其後そのち安房あふ守まもり勘助くわんすけ向むかひ。今日けふ城しろ中なかを

矧未甚あまと不與あま其上あま若侍あまども曾あまて慎あまみの道あまをあらはに高あま
 声あまの笑あまひふよあつて。貴客あまのいきどろりをおとせ。今あま一應あま
 主人あまみもむべし。若あま翁あまんごらみ軍法あまの奥旨あまを問あまはる
 事あまあらむ。よろしく申上あまて貴足あまを當所あまみとめあへ。然あま
 らも當家あまの幸あまひ。某あま一あまが大慶あま此上あまにあるべうらにたり。勤あま
 助あまがいそく足下あまの忠誠あまを以あまて吹舉あませらるること感あま称あまを
 る。堪あまたり。然あまもども。又何あまやと心を尽あまして勸あまめらる
 とも空あましく舌あまを勞あまするのこめりて。決あまして用あまひむべか
 らむ。ともども又あま仕あまらむる心あまも。仕あまらむるも用あまひ
 める時あまはいつらど也あま。むら。鄭あまの國あまみ賢人あまあり其名あま

を列禦あま冠あまとりの家あまりつて貪あましく。妻子あまもみふらむたる
 色あまあり。尔あまもども更あまみ困究あまを以あまて苦あましことせは。其時あまの鄭あま
 主あまを穆公あまとりの國あまの政刑あまを悉あまく宰相あま子陽あまとりのみぬ
 つとむ。子陽あま既あまみ國權あまを取あまあが。國あまみ賢人あまある
 とをあらは。列禦あまを助け用あまひむ。ある人あま子陽あまみ告あまてしそ
 く。列禦あまみ賢人あまあり。此國あまみありてらむたる色あまあり。是あまを
 あらむ。て救あまとらるる國あまの耻あまあらむやといひけむ。子陽あま
 是あまを聞あまて大あまひみおどろき。多あまくの米穀あまを車あまみつて使臣あま使あま
 以あまてらむ。贈あまる列禦あまとらむを更あまみ受あまは。其妻あまみひをうつて
 おけき。あつらふていそ。世間あま有道あまの士あま。皆用あまひらむ。其



山本勘助義元侯小汚目足の不

餘沢を以て妻子皆安逸を樂とせしむるにあり。國君
 今我夫との徳を聞し召を米穀をそあへておくりぬ。尔
 るふ受むして之く一車六ひつある道理を。列禦がいとく國
 君予を知つて此贈り物をたまはるふあらしむ。人の勧め
 何ぐるを以て。初めてしをを去つておくらるると聞り。
 凡そ國君又ハ宰相たる人ハよく賢不肖を去り。其賢を
 勧め不肖を去りてくを任として。人のまをを去るは
 して用るりの也。人り我を盗人ありといふ。捕へて刑
 行ふべし。人の言を信して人を用ゆる者ハ。又人の言を信
 して人を捨る者也。ある危きを賜りの受はといへり。其

後一年ふして宰相子陽ハ國人の為ふ殺さるたり。列禦ハ
 無事あることを得たり。実ふ列禦ハ之を去り。天下
 の主上一國半國の主君たり共。自智の明を護してよく人の
 能不能を察し。用ゆべき者ハ人のまをを待むして是を
 用ひ。其用ひてありき人ハ千人万人もむとも用ゆべし
 也。是を戰國の急務とせしむる所あり。今四海大いふは
 て諸侯たがひ隣國をうかひ。其虚をうんかへ併吞せん事
 を計る。是を以て明智の大名ハ皆高名の士を求め。其大智
 を試し其能を去らび。家風を起して天下ふあらんと欲
 するの折柄あるを。猶以て賢士ハあくて叶はぬ時也。既

嘗國の如きは。駿遠参^{せん}。三國の大守あり。一々明智をあるひ。天下の賢士をつのり用ひたり。四海をたかごらふせん。ことたやまあるべし。然るも大守の明^{めい}を以て賢不肖。能^{のう}不能^{のう}をあることあり。足下何やと進めらるるも用ひあり。又天地をひるべし。天下を一つもふ取^と所^{ところ}の手段あり共。其君たる人信用せざる時。其能^{のう}をほとと事あり。やごとをも事あり。時^{あつ}に在て益^{えき}あり。徒^{いと}とあり。夫刀鎗弓馬の武術。士卒のしごと也。采配^{さいはい}をあり。万軍をたかごらふも。軍法へ主將の手段也。武の家お生^{なま}る者^{もの}の小兒^{せうじ}といへども是をある。いそんや大國の

君と。能^{のう}ありむんばあるべし。漢土^{かんど}の蜀^{しやく}の前^{ぜん}主^{しゆ}三顧^{さんこ}して諸葛孔明^{しよかくけいめい}を得あり。文王の聖人^{せいじん}ありといへども。三たび太公望^{たうこうぼう}を磻溪^{ばんけい}ふ訪^{ほう}らひあり。是則ち太公望孔明ふ。戦略軍法ある故也。今大守の某^{たれ}がを召^める事も。足下のよめあり。其^{たれ}いさか軍略をある故あり。兵法の玄機^{げんき}をもさぐる。治國平天下の事も論^{ろん}あり。唯^{ただ}刀鎗^{とうきやう}の小枝^{せうし}を以て試^しんと志^しあり。本^{もと}を捨て末^{すえ}を取^とりふ者也。又座中の為^{ため}体^{たい}く嚴重^{げんじゆう}あり。其上^{そのかみ}勸助^{こんす}を四体不具^{しよたいふきう}のわく者^{もの}。動作^{どうさく}皆無骨^{みなこつ}あり。一座^{いざ}の侍臣^{しやくしん}某^{たれ}が行步^{ぎんぷ}をあるを見て。声を發^{はつ}して笑^{わら}ひ。大守もひとし

笑ひ者と志あふ。更ふ豪傑の士を愛するの道あ
 らば。賢士を用ゆるの君主の愛妾を殺して賢士を用ゆ
 るとも聞きけり。昔一戦國の時。趙國てうこくふ平原君へいげん趙勝てうしやうといふ
 人あり。天下の賢士をあつむ。こゝろあつて至いたる者數千
 人ふ及べり。あるとき一人の賢あしあたる賢士来りて趙勝が家
 へ客きやくとなり。ある日河辺かうへんふりより水をくむ。そのさぬいど可
 笑しげ氣あり。此日平原君が愛妾あいせう楼上ろうじやうふ在てかれ賢士の水を
 汲くみありさぬを見て。あつらうの侍女と共に声をそろへて笑
 ひける。其翌日あつひあ賢あへたる人。平原へいげんふまゝていさく。これきく
 君の賢士を貴たつとび妾をいやしめあふよを聞き。此故ふ

賢士皆千里を遠しとせざりて爰よふ来る。吾不幸われありて疾
 ひ故ふ足あへとある。然るふ昨日きのうたましく水を汲むを見て。
 君が後宮こうきゆうの女共にょどもも色を笑ひ者とせり。願くは臣を笑へる
 女にょを挿さへて首くびを斬きむといふ。平原君是を切きらんとせら
 けりつて。終ふ其妾を殺さば。凡そ半年あまりりりて
 賢者日くふ退あうそき去て。止まる者もつらあり。平原君怪あやし
 く思ひある人ふ問ていさく。我家の賢者日くふ引去ひきい
 るの故あるをや。かの人こゝへていさく。君さきふ足あへた
 る人を笑ひたる義人ぎじんを殺しむをさるふよつて。色いろを愛
 し賢を賤いやしこゝろふといひて去さりといふ。平原君是を

さとりて笑える所の妾が首を斬りしけり。足あへある人の
 門ふりつて罪を謝し此事四方に聞へ平原君こそ愛妾を
 切つて賢士を貴ぶと。後又来る者救千人に及べり。是れよ
 つて趙の国天下に威を震ひ名を千歳にせり。さも賢士を
 愛する人の我氣に入たる美人を切て。猶賢士を愛し。今
 大守がうけつの賢士を求めむ。是を急度尊敬をせし
 若賢士をあらんむ。者あつて嚴科の處せしめて示す
 也。又そむるどみあくとも。近士を一兩輩あつり。ありけ
 けむ。誰う法度を背くものあらんや。平生の号令嚴
 ありざる故。他國の客に對して礼をせざる。ある有状

今足下を對し。大守の法令紀律をきことを述るハ罪万
 死ありあるといへども。此程より深くせんを蒙る
 故。もかりをせり見む。申しありと。道理ありと。り
 て申しける。庵原安房守も勘助に説付らせて。足下此
 言一我が心肝を鐵杖を以て刺がどりとしへり
 智者の遠見むあるなり。十六年後鳴海合戦の時義
 元の軍勢勝りしに。以て敢て主將の号令を用ひむ。さ
 んで織田勢を追うけ。旗本大い空虚せり。信長これ
 を察し。後方の山間より。急り迫り不意を討て大

りふかつ義元桶狭間の討死したまひし。法令嚴あら
ざるが致もところありといえり

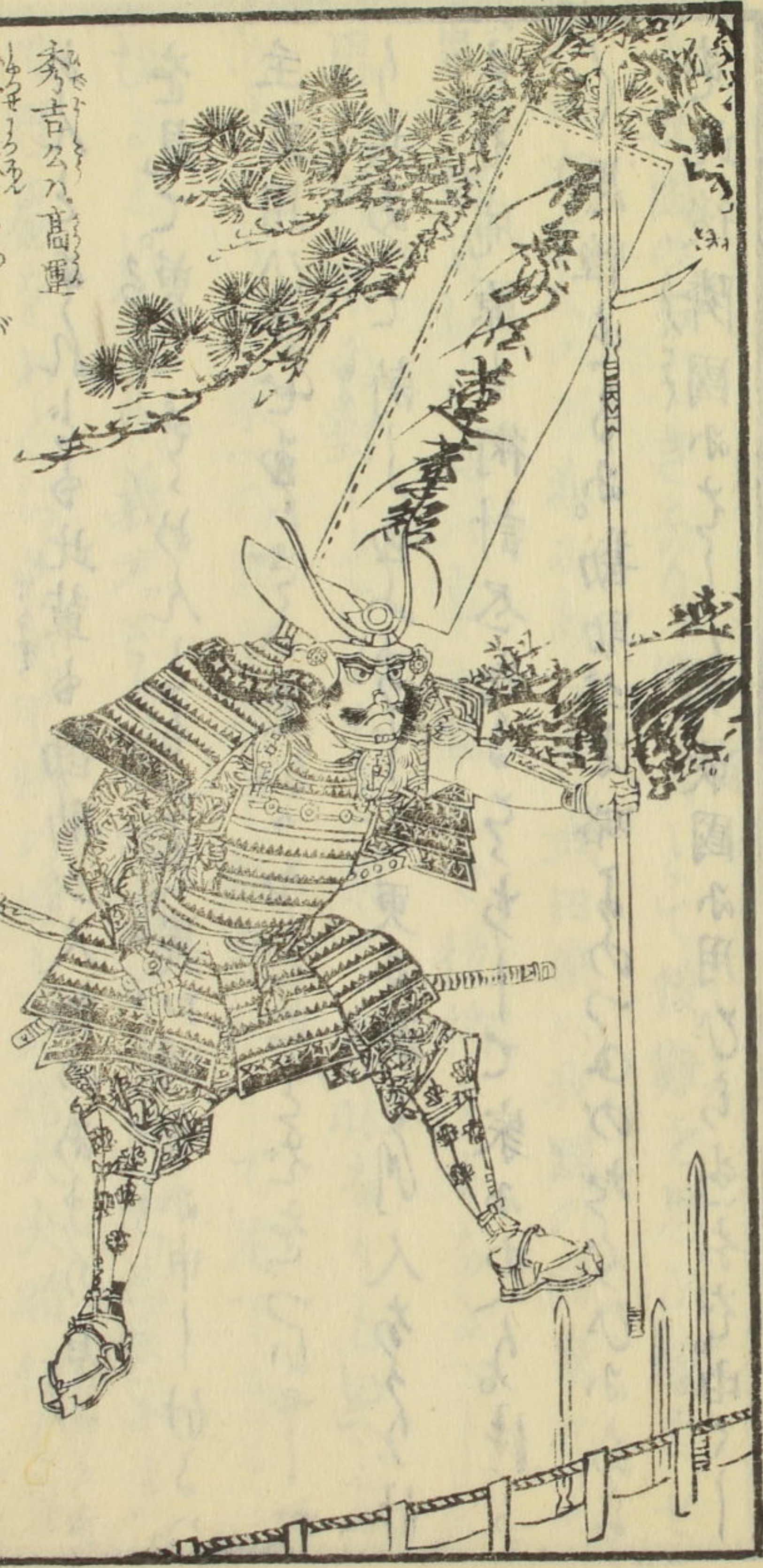
庵原安房守を何とを勘助を止め用んと思ひ。再び義
元の座前へ立出まふ。義元憤激の色面上ふあうまふ。い
うふ安房守汝が勘助が能をあげ武術軍略ニツあがら
人ふ卓絶とりと讃るふより對面してとろ見るなり。
其不敬の狂漢世のもこまりのとりとべし安房守謹し
んで勘助が申せしことども逐ふべし且又万卒を得安く
一將を求めがごとし。又あつての大將を求め易し。がうけら
の賢將ありとむる事あつては。勘助がどとき者も。智略

藝術万人の勝も。當時天下の奇尤也。たぬく我國ふめぐ
り来るを用ひむとべし。て他國ふ用ひらむを。後悔願を
かむとも及びがごとし。何とぞ御用ひあつて當家の繁栄を
起しむべしと申し上げを。義元頭をあげて勘助がい
ま汝をせめたる事。短を以て短をせむるといふべし。今
日くも對し。武術を試合せよとのをこしん。たとひ予が
り所道理の中らふと共。過言即答ふ及びはともよか
らん。予が耻辱をゆへたるは。のまが大量あきふあつた
やんそ人の尤を試るふ浅きよりさぐりて深きみひ
ふ。是通義あり武術一人の勝負匹夫のまごあるま

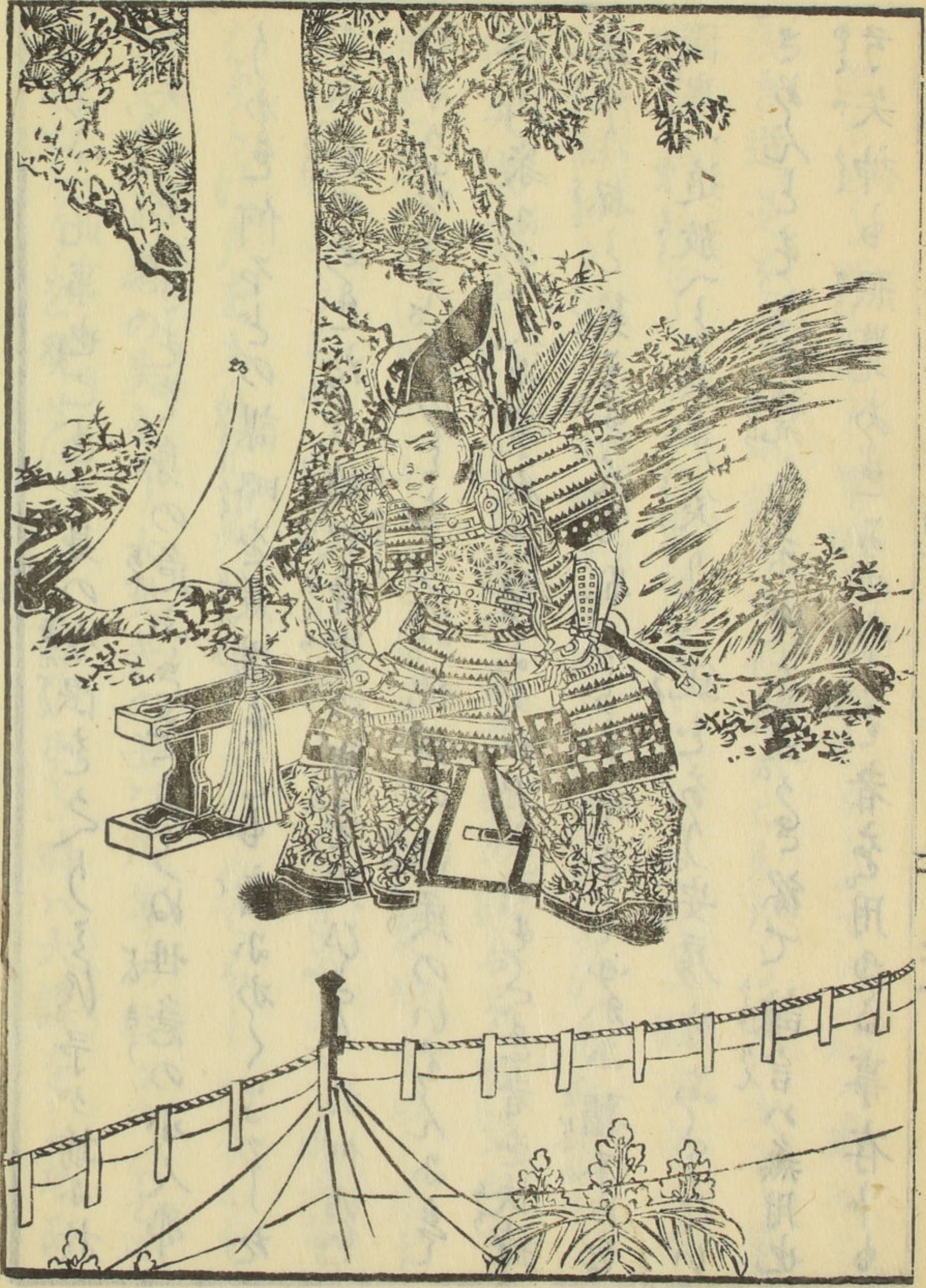
誰もたる所をう。軍略と武術とありてり。時ハ武術も
 浅き道。是を最初試み武術衆ふらえたる。時ハ次ハ軍
 略を討論せん。夫ハ軍法者といふをたたる。臨濟寺の聖
 派和尚あるハ葛山備中守のむときをあれ。此者らと
 得失浅深を計らんと思ひ。先武藝の試合を所望せり。
 彼を思の外いきどろりをいごきたるハ是短を以て短を
 せむるハありむや。又其人と為らむくきふあり。近士等
 もうら声をあけて笑ひしをりとめてありたる。あは
 ありむ不慮の失あり。大丈夫の士ハ是等の此うのことか
 いきどろりを発せ。小を忍びざる時ハ大謀をとなたふ

とあるハ此事也。已まが身の分限をうりて。予が前み於
 て失言をいごも身の危ふきをあらぬ世急の小人邪
 り。あは何やどの謀略を兼備もとも齒ふあくるりた
 らむ。長の志きたる醜奴身中の智を用ひたり。共何ゆ
 の事うあらん。夫のともあらむ。他國の諸侯のいもんぬを
 今川家ぬ人ぬ事ぬきたる。ゆゆをたて者扶持
 志たり探と笑しをんも耻あらむや。まもやか小孺子ぬを
 國界へ追放へと其声尖りて鋭どあり。安房守あつびい
 さめんとするハ荒らる座を立。うき縁て諫言ハ無用也
 弓矢神も照覧ある。そのめこと者を。用ゆる事存トも

秀吉公の高運
 出世日本一のあしひが
 者あり。尾州愛知郡
 中村の百姓より出で天下と
 るる。白太閤とあり。あひ
 世上の出世のあしひが。武將
 たる者ハ貴ガベ。



加多清正入武勇よしあしひと。無双の
 産人唐日あしひあしひのあしひ。其あしひ
 仁智あしひと。あしひあしひあしひ。
 貴ガベ。



三徳山三徳山

ありては。應たてのふもま礎と引く。奥の間さして入
 る。安房守も諫めを容れざるを察し。城を下り朝
 比奈兵衛固部五郎兵衛杯をさぬぐみさとし共り諫
 めんとせむれども此輩も勘助が人物のあまり見ぬき
 を見て。曾てせむれんとせむ。異口同音申しける。ハ
 主君用ひさせぬざるをいうやどことをついやうた
 り共。あへて許しぬれぬと更み執り人ありけ
 るを。庵原も術計尽たるさちして家おぬり。はら
 く思惟するふ。勘助が才略よのつひのたぐひふあら
 む。此後隣國おとり。敵國お用ひらむおむ。由り

き我國のあんぎあり。然らばとて後難を思ひ殺害せ
 んハ大丈夫の所為ふあらむ。武田家の我國の縁家也。うの
 家お勧めおく時ハ事お臨んで後揃ともあるべしと
 思ひ。勘助お對してしやうハ。某ハ愚昧ありといへども。
 ひこまう君家への忠を存ト。顔色犯して足下をま
 むるといへども。義元さうお信用せしむ。あまふよ
 て思慮をめぐらむ。甲州の城主大膳大夫晴信を専
 ら奇支の名士を募り用ひらる。又旗下り豪
 傑の士多く。殊更家士甘利備前守ハ忠義智謀あり
 ともへたる。勇士あり。幸ひ某ハと交り深し。一封の書

を調へ足下をまゝめんと思ふ。是より甲陽へおもむき
ふまどきやとりよめ。勘助元來暗信と約をあり深く
示し合せしむ。旨あつて。うゝ國を遍歴し。最もや
甲州へおもむくんとおもひ折る。安房守がことなきを
渡り舟を得たる心地して。悦喜色ああらそむ。答へ
けるハ晋の豫讓がいそぐ士ハ已色をある者の為死
をといへり。某貴宅ハ草鞋をぬいでより。救月の間
ご恩遇を蒙り歡喜一言め尽し。今又書を以て
甲州へまゝめらる。足下の下意も明白ふこれを察せ
真ハ忠臣の所為感心もめたく。若暗信朝臣某

一が不器を捨ぬるむ。ころざしをわさぶけて仕。長く
貴士の恩をすすむ。まことや書めぐと申
はめを。庵原も勘助が唯今の一言此方の心中をあるとい
ふハ安堵の思ひをあり。いよくかきか支智凡夫のた
かひふあらはとわごろき。書をまゝめて。しりけ
ハ山本も旅行の用意をあり。頓て甲州へおもむきなる
○今川義元ハ山本勘助を用ひぬ。又其後幸ハ家
來松下嘉兵衛の所ハ木下藤吉郎あり。是を引上てよく
用ひぬ。天下の主トとあらん事疑ハあり。然るハ其人
を用ゆる事をあらむ。終ハ其身國家迄滅亡せしむ愚

將とりよへど。富士川ぬ於て北条氏康と戦ひの時。木下
 藤吉郎松下嘉兵衛の所やうきを救ひ。又北条家より名
 高き大将伊東日向守を討取て。北条の軍を中ぶりし。ハ
 是木下が技群の働きあり。手並のほどいふ事たり。是ふよ
 川て今川義元藤吉郎を呼出。大いふやめて手づから
 恩賞をもあて。一組の頭共あをべき筈あるなり。其事を
 あく。せめて詞のやうびあり共あるをすべき筈あるふ。夫も
 あし。是ふよ川て藤吉郎ありひけるやうい仁智ある大
 將あつて某一を呼出。恩賞をも行ふべき筈あるなり。
 其事もあきい愚將あるべし。あくる愚將お仕つてハ何の

益うあつんと。今川の旗下を逃て。尾州清頂の城主織田
 信長公お仕ふ。信長公ハ藤吉郎をよく用ひおひて終り
 七天下の権を握りたまふ。是外の事おあらは。藤吉郎お
 恩賞を興へよく用ひたるによ川てあり。憚りあがら信
 長公をたゞめ柴田佐久間等の働きを以て。京都の真中
 小旗を建。
 禁裏を守護し奉る事ハありがごとし。是偏お藤吉郎
 が働きりよ川て也。然らむおれた臣下ハやうきりのあり。
 万卒ハ得安く一將を得がごとしといふハこの事あり木下
 かあをむ天下こやうの。木下かあけむハ大名あもあはがこ

事ふものたう自家も他家ふせめらまて。滅亡ふ及んも
 ちうりがと。木下があげまば。信長公も美濃の國江及
 於てもあやふき事度くあり。又遠藤喜右衛門より殺さま
 ぬふべし。尔るふ其あんをのがまぬふ。木下があるふあつ
 てあり。武將たる者へよき臣下あくて叶はざることあり。
 ふれ臣下の世畧第一の宝あり。智仁勇の三徳ある良臣
 を求むべし。乱世の猶更治世といへども。大入用の事あり。國
 家を治め万民を撫育まするふ。智仁勇の三徳ある人
 何らざるべし。万民を安穩ふ治むることありがたし。斗
 屑の小人何百万人ありとも。大事の用ふに立がと。又

何を民を治むる事をあらんや。若智仁勇の三徳を
 あへたる人あくば。篤実の智者を用ひて國家を治む
 べし。不忠不義の人を決して用もなからば。大いふ國家
 の害とあり。終りの全家を亡まべし。
 ○今川義元候の駿遠三の大守めして數万の軍勢あり。
 向ふ所落さむといふ事あり。小國小勢めて天下を十年
 ふ取らむ。大國大勢の今川へ二年三年ふ天下を掌握べし。
 木下を軍師として諸國の大名を攻討を天下ふ敵あり。
 手ふ立者あるべからば。尔るふ智仁勇ある木下を用
 ひざる故り。取べき天下もとり得む。あまの川と藤吉

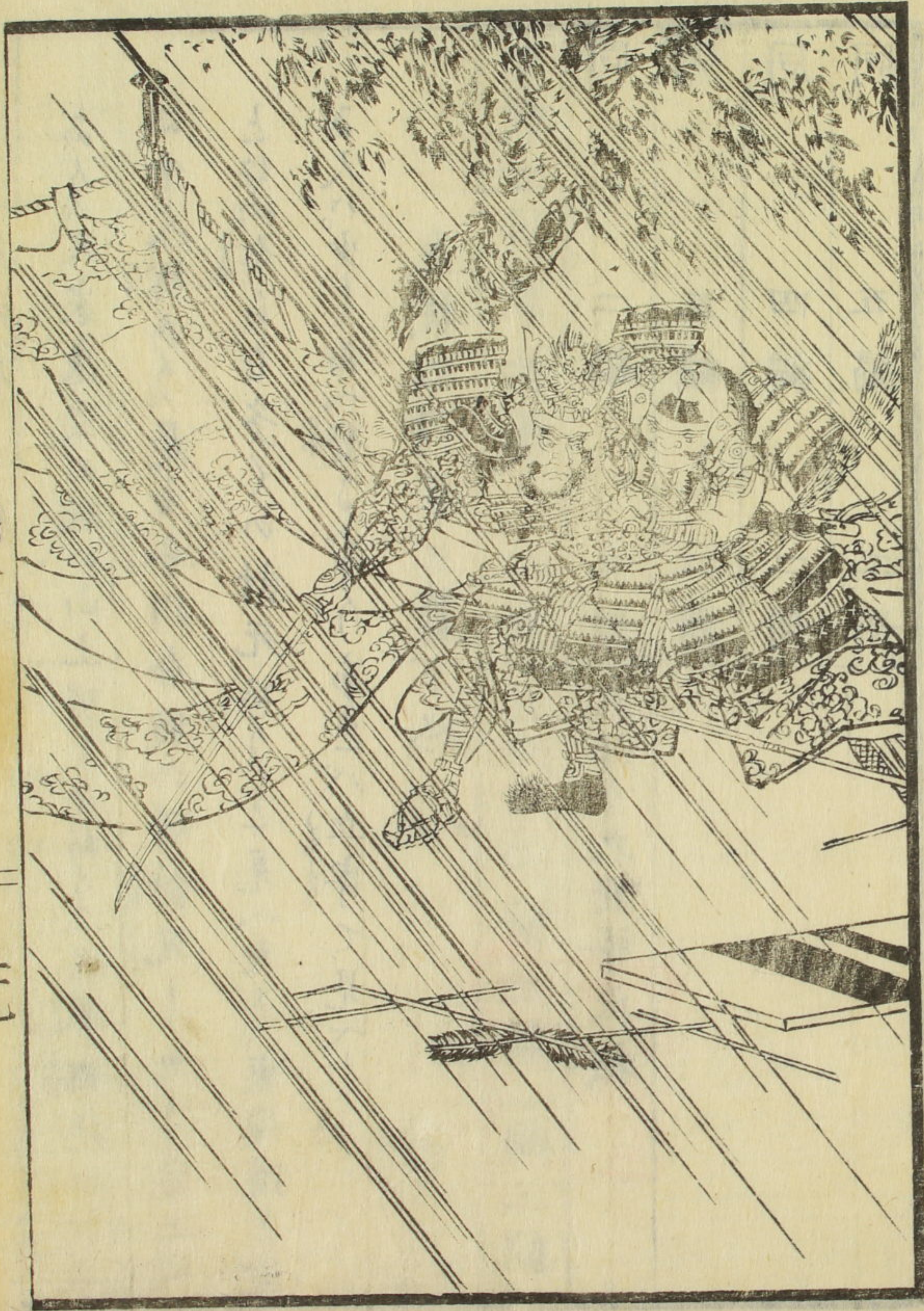
郎の謀計まうけいは落入おちこて。其身みは尾州びしゅう桶狭間おけいあまの土つちとあり。四万五
 千余の軍兵を大方おほほうらろせし。残念ざんねん千万あり。御先祖おんせんぞの
 丹誠たんせいも水の泡あわとあり。其時の妻子家来せしけんぞくけんぞくの皆路頭みちづち
 了りやう迷まよひ飢死寒死うまいふせふせしありん。是こゝて人を用由たるの大事だいじ
 をよくあるべし。又よき人を用由たるを骨折こつこむ苦勞くるわうあり。小
 高枕たかまくらふて天下をとり。日本中の最上人さいじん武士ぶしの長者ちやうぢやとある。
 大いある出世しゅっせあり。又よき人を用ひざる時ハ。己おのれの愚ぐ
 將しやうといふ也。其上そのかみあり。首くびを切きて。親子兄弟一家一門家来いっか
 んぞくけんぞくまで。皆冥途めいとの鬼あまとあり。末世まうせ末代まうだいまで人の笑わらひ
 草くさとある。ハ口惜くちやくき次第しだいあり。義元よしかげ候も木下きのしたを用ひざらん。

眼前がんぜんあり天下とありん事疑うたがひあり。其木下きのしたを用ひざらん
 て。天下を失うしなひ其上そのかみあり。御先祖おんせんぞの大功たいこうを潰つぶし。己おのれの冥途めいと
 の鬼あまとある。ハ不覺ふかく千万此上このかみとある。益えきあり。人を用由た
 るの大事だいじ也。此今川氏このけがしと木下きのしたとの事ことあり。よくあるべし。
 外ほかくを勘かんへ見みる。及およむ。是こゝよき現證げんじやう也。是こゝよりよ例れいて
 智仁勇ちじんゆうの三徳さんとくある人ひとをえらんで。奉用ほうよう也。主君しゅきんたる
 者の職分しやくぶん大事だいじの中の大事だいじあり。堯舜ぎやうしん等の大聖人たいせいじんさへよ
 き臣下しんげを心こゝろりうけて。求めぬ。况いふや其外そのほかの者ものとも。ハ猶
 更さらよき臣下しんげあり。てを叶かなへぬ事こととあるべし。是こゝよりよ例れい
 てよ。臣下しんげを用ひて一家一門家来いっかけんぞくけんぞく民百姓たみひやくしやうあり。

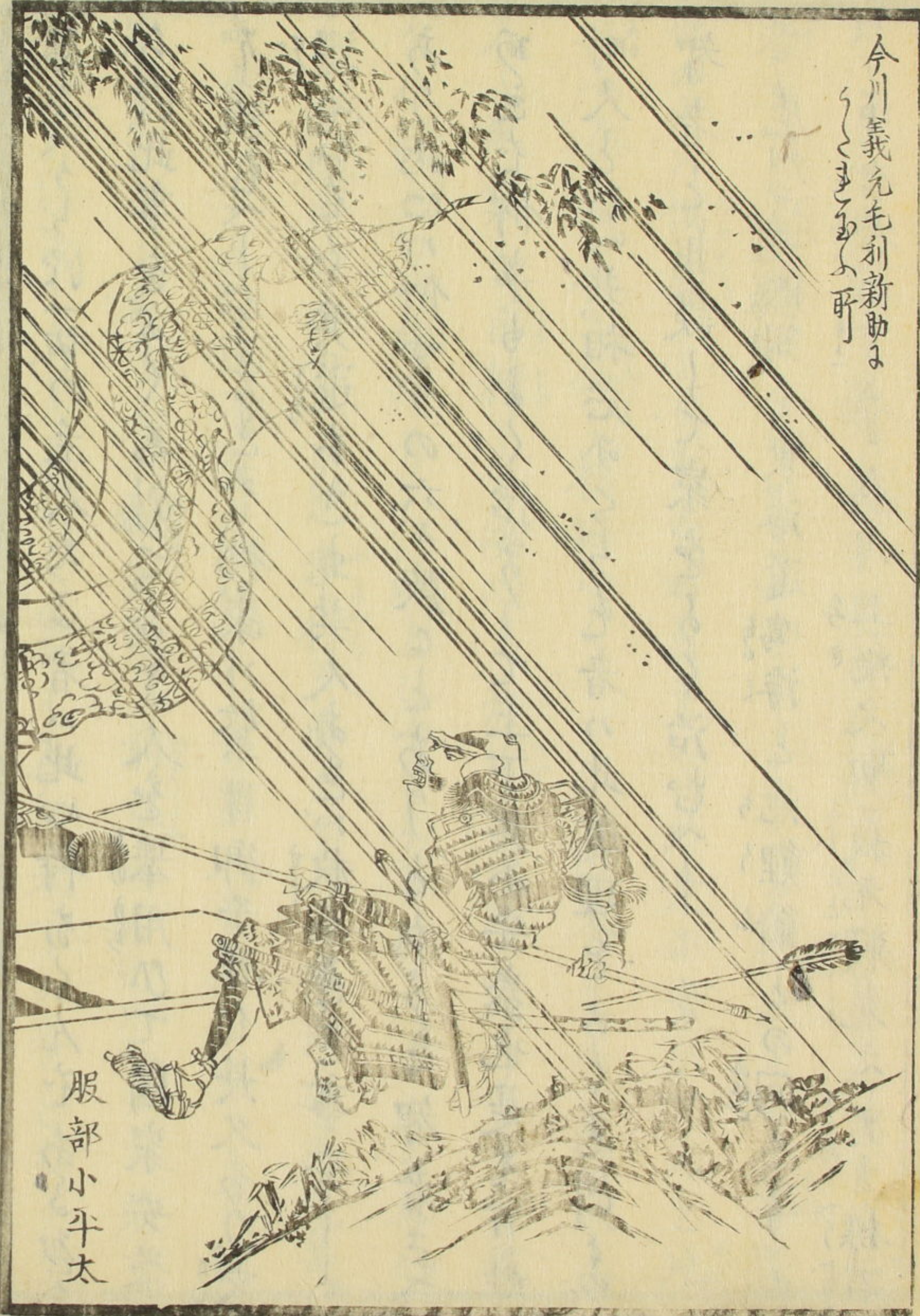
たるまで安心し養ふべし是を仁政としよ。盲目ちんを不仁者までも安穩にくらせざるやうしむるを仁政としよ。都て世の中ハ俱暮しあををいよめ是ハ幸ひせん。片寄べくく人々分く相応ふくらしハ出来るやうふせべし。入る家業を出精して安心し渡世の出来るやうしむるを仁政としよ。此外より仁政としよをあきぬり。万民を安心し渡世させんぬぬ。あき奉行があくてハ出来ぬ事あり。是ふよつてふい臣下を求むべし。あき人を用ひむして。國家を亡がしたる人の救多あり前車のころつがへるを見て後車のいましめとせべし。是を今川木下の事とせり。

思ふべうらば一切の主たる者ハ此心得あくんをあるをうらば。此事をよく志しつて。あき人を擧用ひて國家安泰し治むべし。さまたを御家の繁昌御子孫を長久あり。文選ふいとく其道あきも。其人あきハ救ふをき事安しとあり。此心ハ何やうの六ヶ敷とありとも。あき智者さへ何をも。何事もよく治まりて上下共ハ安泰也。是を百姓町人としへ共。相応ふくらしむ者ハ此道理をよく志しつて。智者と相談して家をよく治むべし。

尾州桶狭間を東海道鳴海と池鯉鮒との間あり。山中古松の下り今川上総之助義元戦死之所と標石



三十一
三十二



今川義元毛刺新助
くさくさ

服部小斗太

三十三
三十四

あり。又家来衆の塚ハ山上所々あり。又善郷村の山上
み千人塚あり。是由今川合戦の時討死したる者の塚
とりよ。尔らむ多くの討死ありと見へたり。東海道を通
る人ハ少く山へ登るむろりあきバ。立寄て見べし

主従心得草三篇下終

同	主従心得草初編	二冊	日用心法鈔初編二編三編
同	二編	二冊	八部十九冊皆出板
同	三編	二冊	
同	四編	二冊	
同	五編	二冊	

